



アイリスの剣 1

小田マキ

Maki Oda

RB

レジーナ文庫



ブルーデンスの家族

▼ティルディア

リユーノ▶

ユージン▲

角狼隊隊長。
ゴーシャの下僕
のような存在。

▲ゴーシャ

フォーサイスの従妹で、
彼を盲目的に慕っている。

◀バーネス

▲ファティマ

フォーサイスの妹。
勝気で男嫌い。

▲ヒラルダ

漆国アイリスの宮廷医。
国内唯一の一級魔術師
でもある。

登場人物
紹介

フォーサイス▲

アイリス騎士団所属・
雷龍隊隊長。
「アイリスの剣」^{あざな}を持つ、
ダグリード侯爵家の現当主。

ブルース▲

アイリス騎士団所属・
雷龍隊副隊長。
性別を偽り、騎士を務める。
フォーサイスの頼れる右腕。

▲ブルーデンス

ブルースの女性に戻った姿。
元上官であるフォーサイスのもとへ、
素性を隠して嫁ぐことに。

目次

アイリスの剣
1

書き下ろし番外編
見え透いた挑発と、芽生えた欲求

アイリスの剣
1

プロローグ

「ふざけるのも大概にしろっ……今さら女に戻れるか！」

極端なほどの音量で拒絶を告げたのは、ブルース・フカッシャー……フカッシャー公爵家現当主にして、漆国アイリスが騎士団所属・雷龍隊副隊長だった。彼は度を越えた驚愕を示し蒼褪め、立ち尽くす。

性質の悪い冗談だ。

到底、正気の沙汰とは思えない。

見開かれた闇色の双眸に浮かんでは消える感情、それは徐々に激しい怒気に集約されていく。

「拒否権などありません。貴方には、ダグリード侯爵家の現当主のもとへ花嫁として嫁いでもらいます」

我が子を冷やかに見つめながら、実母ティルディア・フカッシャーは、翻ることはない決定事項を、再びその舌に乗せた。

第一章 存在価値

1

まるで魔窟^{まくつ}に踏み込む剣士のような強張った面持ちで、ブルースは母ティルディアの私室の扉の前に佇^{たす}んでいた。

ガラス球のような冷たい双眸^{そうぼう}は、余すところなく自らの心のうちを見透かし、嘘偽りは一切通用しない。正真正銘の実母ながら、愛情よりも先に失敗は許されないという強迫観念が浮かんでくる。物心ついた頃から、その想いはブルースの心の奥底で肥大していくばかりだった。

だから、母と対峙^{たいじ}するときはいつも緊張で全身が硬くなる。ただ、今回入室^{ちゅうしつ}を躊躇^{ちゅう}するののは、ティルディアへの畏怖^{たいふ}だけではなかった。

母は今、懐妊^{たいじん}している。

六ヶ月前にその報を受けたときの驚愕^{きょうがく}は、今でもありありと思い出せる。それと同時に

に、斯^かくも母親の執念とは強いものと恐怖さえ覚えた。血を分けた弟、もしくは妹が生まれてくることを喜ばない者はいない。無論、自分もその中に含まれる。

けれど、ただ単純にこの吉報を喜べない我が身が呪わしい。五年前までは弟の誕生を切望^{きつぼう}していたが、今は妹であつてくれないかという想いを打ち消すことができない。否^{いや}応^{おう}なしに押しつけられた人生は、ある人物に出会って確かな色を持つようになっていたから。

昨日、母の主治医が往診に来ていた。そろそろ、男女の区別がつく頃だろう。ここに来るまで廊下で行き合った使用人達は、最悪の事態を想起させるような憐^{あわ}れみの視線をブルースに向けてきた。

「いつまでそこに立っているつもりです、お入りなさい」

扉に手をかけるのを躊躇^{ちゅう}っていたところ、扉越しに声をかけられ、ため息を呑み込^のみ込^めうとしていた喉^{のど}がしめ上げられる。

「お待ち申して申し訳ありません、……母上」

心も整わぬまま、急^せかされて入室したブルースの目に映ったのは、神秘的かつ慈愛に

満ち溢れた光景だった。ゆったりとした前合わせのドレスをまとった母は、柔らかな光の差す窓辺で安楽椅子に身体を預け、丸みを帯びた腹部を両手で抱いていた。

まるで宗教画だ。ブルースがそう感じるのには、慈しみに満ちた表情のせいだけではない。両手とは別に、背後から伸びて下腹を覆っている純白の翼……母は生粋のオルガイム人だった。

この世界、すなわちエリアスルート唯一の有翼人種である翔国オルガイムの民は、四肢とは別に一对の翼を持つ。寿命こそ他国の人間と大差ないが、卓越した身体能力を有する彼らの成年期は格段に長い。

五十五歳になる母の外見は高く見積もっても三十歳後半、成人して四年経つブルースと姉弟に見られるくらいだ。もちろん生殖期間も長く、此度の懷妊もオルガイム人からすれば驚くことではなかった。種族の懷妊最高齢は、八十を上回るらしい。

そして、普段は自在に体内に収納できる翼を、妊娠中だけは己が意思では制御できなくなる。卵を抱く親鳥のごとく、我が身に宿った命を二対の腕で抱いて一年を過ごすのだ。ひざまずき、祈りを捧げたくなくなるような姿に、ブルースが抱く想いは複雑だった。

自分が母の胎内に宿っていた頃も、同じような慈しみの眼差しを向けてくれていたのだろうか？

心は激しく否を告げる。いつも自分に向けられる母の視線からは、鋭利な刃物を喉もとに突きつけられているかのような冷たさを感じる。銀の髪に薄水のような紫色の双眸……人形以上に整った容姿を持つティルディアが自分に向ける顔に、母親としての愛情を見出したことは一度としてなかった。

ブルースは母の希望、そして父リユーノの期待に一度も応えられなかったことがない。自分は代用品に過ぎないという思いが、いつもつきまとっていた。父の命で入団した騎士団で、母から授かった身体能力によって武勲をいくら上げても足りない。両親が望むべきフカッシャー家の跡取りとして、自分には決定的な不足があった。

もう何の言葉も必要ない。我が子の誕生を待ち望む母親の顔を見るだけで、答えは明らかだ……父の大願は、間違いなく成就した。

「ブルース・フカッシャーと名乗るのは、そして男を名乗るのは今日までのこと、貴方の存在価値はなくなりました……フカッシャー家当主はこの子、バーネスです」

フワリと微笑んだ後に顔を上げ、こちらに向けて平素と変わらぬ視線とともに告げられた言葉は、決して抗えない宣告。拒絶することはできないのだと、骨身に沁みてわかっている。今はただ、足下が崩れるような虚脱感とともに次なる命令を待つ。

用済みとなった我が身に課せられる次なる役割と、新しき名は……

「ダグリード侯爵家現当主にして、アイリス騎士団雷龍隊隊長フォーサイス・ダグリードは……」

この場には無関係な、しかし聞き慣れた人物の名が耳を突き、呼吸が詰まる。助走を始めた鼓動は、瞬く間に両掌に冷たい汗をかかせた。そんな自らとは対照的に、弧を描いた母の唇が紡ぎ出す言葉に、身も凍るような恐怖を覚える。

「爵位こそフカッシャー家に劣りますが、アイリスの剣」とまで呼ばれ、陛下の信頼も大変厚く……釣り合いは十分にとれています」

釣り合いとは一体何のことか……古くから続く軍人家系であるフカッシャー公爵家とダグリード侯爵家は戦地での誉れを二分する由緒正しき貴族。たとえ因縁がなくとも、拮抗する勢力はそれだけで確執を生む。現に父が鬼神のごとき剣の才を持ったダグリード家現当主を苦々しく思っていることを、自分はよく知っている。それゆえに、不出来な己に苛立っていることも……

「貴方には、ダグリード侯爵家の現当主のもとへ花嫁として嫁いでもらいます……ブルードデンス・フカッシャーとして」

さらに続けられた言葉は、死刑宣告よりも衝撃的だった。

「ふざけるのも大概にしろっ……今さら女に戻るか！」

考える暇もなく叫ぶ。恐怖を凌駕し、ブルースの心に広がったのは御し得ないほどの強い怒りだった。

「十一年前、母上が望んだのは息子としての私です！あの頃は貴女の鞭が恐ろしくて従ったが、今度ばかりは無理だ！私は雷龍隊副隊長ブルース・フカッシャー！この五年間もつとも彼の近くにいた人間ですよ……どれだけ鞭打たれても、それだけは不可能だ！」

自分の初めての激昂にも、母が向けるガラス球のような寒々しい双眸は揺るがない。まるで母と自分の間には分厚い氷の壁があり、この声が届いていないかのようだ。それでも、彼を巻き込むわけにはいかないのだ……初めてこの生に意味を見出してくれたのは、フカッシャー家にとつては仇敵であるフォーサイスその人なのだから。

「サクリファの妙薬というものを知っていますか？」

美しく紅を塗られた唇が紡いだ次句の意味を、ブルースはすぐに理解できなかった。いかに残酷な言葉をぶつけられても耐え抜こうと、肩に込めた力が出口を失う。

「先頃、高名な魔術師であられる魔法大国ガルシユの宰相ユーシス・バン・エセルヴァー

ト閣下が、その開発に成功されたそうです。死者さえ蘇よみがえると言われる奇跡の薬なのだそうですね。魔導石サクリファを砕いて作るその薬は、フカッシャー家の財力をもってしても大変に高価なもの……命の値段、ということなのでしょうね」

引き上げられた口角……その言葉を正しく理解したとき、胸に渦巻く怒りは激しい恐怖へと変わった。

「交換条件、ということですか……母上」

「お母様とお呼びなさい、この十一年間で貴女は随分と粗野で浅慮せんりょになりました。これからの半年間で、貴女をどこに出しても恥はにかずかしくない貴婦人に磨き直します……そうでなくては、お父様の顔に泥を塗ることになります」

予定ではなく決定事項として舌に乗せた母の目は、すでに自身の腹部に落ちていた。先ほどまでの鋭利な光は瞬またたく間に聖母のそれへと切り替わる。

絶望が胸を満たしていた。彼女は幼い自分を従わせるために鞭むちを使った。そして今、徒いたちに身体を傷つけるだけのそれはもう必要ない。どんな体罰も、突きつけられた言葉に及ぶものではない。母ティルディアは、何を使えば自分が屈服するか……今も昔も当人以上に知り尽くしていた。

「返事はどうしました、ブルーデンス」

立ちすくむ彼女に、追い討ちをかけるように行儀を促す。

「……はい、お母様」

強いられた服従の言葉を舌に乗せたとき……この五年、危うい平安をもたらしていた偽りの世界は、再びその色を失った。

* * *

一体、この十一年間は何だったのか……ブルースは兵舎の執務室で荷物をまとめながら、ため息を禁じ得なかった。

ブルース・フカッシャーは、十三のときにアイリス国王立騎士団に入団した。勤勉に鍛練、任務をこなして順調に経験を積み、遂には騎士団内でも誉れ高い精鋭部隊・雷龍隊の副隊長を任された。当主としての務めは……他の軍人家系の基準であれば、十分過ぎるほど果たしたといっても過言ではない。

それでも、自分の存在価値なぞ生まれたばかりの弟の前には、塵芥ちりあかたに等しいものだっ

たらしい。ずっと自分の意思を抑え込み、フカッシャー家のためにすべてを諦めてきたブルースだったが、かつては夢見た重責からの解放も、今は簡単に喜ぶことができない。昔の生活に戻るなど、今の自分にはできないのだ。あるのは、理不尽な要求を受け入れざるを得ない屈辱と、この先に待ち受ける運命を拒絶できなかった己の不甲斐なさへの苛立ちだけだった。

頭が痛い……無意識に右のこめかみを押さえると、その指先に触れるのは五年前の傷跡。半年前のあの日から、考え込むとつい触れてしまい、今では半ば癖になっていた。腰まである漆黒の髪。その前髪の生え際に位置する裂傷が消えることは生涯ないだろうが、決して目立つものではない。

騎士として生きる決意を固めていたブルースにとって、些細な顔の傷などどうでもよかった。名譽の負傷であつたそれは、両親から咎められることもなく、雷龍隊長フォース・ダグリードの信頼を得ることもでき、今の立場を得られた。

しかし、それもまたこれからの自分の歩む道には大きな汚点となるのだ。早速、母には浅慮だったと戒められた……当時は、父とともに功績を褒め称えていたというのに。過去の幻影達に名を呼ばれたような気がして後ろを振り返ると、そこには姿見があり、己の姿が映っていた。

精鋭揃いの雷龍隊は、厳しい鍛錬で作り上げられた鋼のような肉体を持つ者ばかりで、その中に混じっているとどうしても貧相に見えてしまう。とりわけ背が低いわけではない、筋肉がついていないわけでもない……ただ、根本的な身体の構造が違うのだ。

ブルースには、アイリスとオルガイムの血が流れている。薄いように見えるこの身体だが、その八割超は高密度の筋肉でできているのだ。最古の創造神が組み込んだ特性……母と同じように両腕とは別に、自分の背には翼があった。

生まれ落ちたそのときから空を飛ぶことを義務づけられた身体は、無駄を許さない。自分の身体に備わった筋肉は、空を飛ぶためのもの……重く、これ見よがしな猛々しさはない。その翼さえ、この国に生きる限り、人目に晒すことはなかった。

だから貧相に見えてしまうのだ。線の細い顔も、それに拍車をかけている。そう大げさに周囲に嘆いてみせた。隙を見ればすべてを失う。精一杯の虚勢と偽りを、漆黒の軍服の下に隠してこれまで生きてきた。

騎士には不釣り合いなその女のような顔は、日々の厳しい鍛錬のためだけでなく疲弊し切っていた。顔色は蒼褪め、目の下にはわずかにクマができています。自信のない、臆んだ黒い双眸、艶をなくした黒い髪……余すところなく張り巡らされた偽りが、剥がれ落ちるときは近い。

これから、この貧相な身体を最大限に利用しなければならぬのだ。この十一年で培った剣の腕、ばねのようなしなやかな身のこなし、ようやく手にした男として生きる矜持。そんな生き方を自分に強いた両親は、今になってそのすべてを何の価値もないものと切って捨てた。

「ブルース、入るぞ」

唇を噛みしめて苛立ちを抑えていたところ、そんな声とともに返事も待たずに執務室の扉が開かれる。

「……隊長」

一瞬前まで回想の中にいた人物の登場に、ブルースは即座に姿勢を正す。

フォーサイス・ダグリード……代々当主には、アイリスの剣の称号が与えられるダグリード侯爵家。その現当主にして、雷龍隊隊長。由緒正しい家系は軍人を数多く輩出し、その遠縁にはこの世界、エリアスルートを救った救世主たるオルガウム王妃がいる。二つの名の通り類稀なる剣の才を持ち、二十三という若さで隊長に抜擢されていた。

雷龍隊が精鋭と呼ばれるようになったのは、彼の功績が大きい。身分に関係なく腕の

立つ者を取り立てたのは、どうしても貴族色の濃くなる騎士団では画期的だった。当然、一癖も二癖もある者達が集まったが、フォーサイスは貴族にも庶民にも、その待遇に分け隔てをしなかった。

それに反感を持つ者、訓練についていけない者は脱落したが、入隊試験はフォーサイスが直々に当たるため、入隊後に除隊する者は少なかったのだ。厳しくも正当な評価を下し、それでいて任務さえ着実にこなしていれば、軍紀に触れない限り多少の素行の悪さは咎めない柔軟な彼を隊員達は総じて慕い、忠誠を誓っている。

ブルースも、騎士としても人間としても優れたフォーサイスを尊敬していた。また彼も副官の自分に信頼を置いてくれていた。それなのに、まさか自ら除隊願を出すことになるとは、これ以上の皮肉はない。

「……決心は変わらないか」

「ええ、除隊届は確かに受け取って頂いたはずですよ」

苦々しい表情を隠そうとしない直属の上司を見て、ブルースの顔にも自嘲の笑みが浮かぶ。

「だが、お前の意思だとは到底思えない」

「私の意思など、最初からどこにも存在していません。家長の命令は絶対……逆

らうことはできない。貴族の家に生まれれば、致し方ないことです」

「内情は聞かん。俺が知りたいのは、なぜ騎士団まで辞める必要があるのかだ」
責めるような強い双眸から瞳を閉じて逃れ、ブルースは嘆息する。上司の前で副官としてはあるまじき態度だが、湧き上がる疲労感を抑えられなかった。

「当主の座を降りて、そのままというわけにはいきません。別の役割が発生したのですよ、騎士との両立は不可能なのです」

「その役割は、俺にも言えないと？」

「申し訳ありません、フカツシャー家の問題なので」

実は、貴方にも深く関係することだ……そう言ってしまったれば、楽になれるだろうか？
「……俺に何かできることは？」

「これ以上、引き留めないでくださいれば、それだけで」

まっすぐに見返して言うと、フォーサイスもため息を吐く。

「決定を覆すことのない頑固さは健在だな……俺一人で、あの癖の多い荒くれ者どもを束ねろというのか」

「ライサチェツクへの引き継ぎは済ませています。あれでなかなか有能ですから、慣れれば私なんかより、ずっとうまく捌けるようになりますよ」

「お前に敵う者はいない……しかし、リユーノ公の考えはわからん。生まれたばかりの赤子に何ができる、お前に何の不足がある」

「過分な評価をありがとうございます。私が期待に応えられたことは、一度もありませんでした。所詮、父にとつては不測の事態に備えた代用品でしかなかったのです」

笑みを浮かべた口元が、不自然な形に歪むのはどうしようもなかった。

「今までお引き立て頂き、隊長には本当に感謝しています。貴方のお陰で今の私はある」
「ずっと助けられてきたのはこちらの方だ、ファティーの件も」

「いいえ、ファティマ様にもよろしくお伝えください」

前髪で隠れた傷の上に留まる彼の視線に頭を振りながら、ブルースは微笑み直す。

「あれはお前に懐いていたから……除隊を許したことで、親の仇のように責められたぞ」

「申し訳ありません」

彼の妹ファティマの勝ち気な性格を思い出し、苦笑を洩らした。

「お前のせいじゃない、それがまた悔しいがな。落ち着いたら手紙でも書いてやってくれ、友人として」

「ええ、喜んで」

兄とはまた異なる美貌の彼女とは、とある事件を通して出逢った。確かに気は強いが、わがままで気位が高いという訳ではない。意志が強く、女性であることが惜しいほどに聡明でもある。男嫌いで知られたファティマとブルースの仲を邪推する者もいたが、興入れ前の貴族の令嬢にあるまじき噂を、フォーサイスも彼女も問題にしなかった。

一時は夫の座を望む者から嫌がらせもあつたが、察知した上司の手によって秘密裏に排除されていたことを、後にファティマから知らされた。ファティマが自分に抱いているのは純粋な親愛の情で、恋愛感情ではない。六歳下だが実に聡明な彼女は、ブルースにとっても大切な友人である。

二人の間には何の下心も存在せず、その関係は何があつても変わらない……それが兄妹にとって重要な信頼になり得たのだろう。そんな唯一無二の友人に、今後、自分が会うことはもう不可能に近い。そのことがブルースを、寄る辺をなくした子供のような気持ちにさせた。

「本当に大丈夫か？」

「……ええ、何でもありません」

覆らない運命を思ううち、無意識に眉根に力が入っていたのだろう……思案顔で尋ねてくるフォーサイスに、ブルースは慌てて笑顔を作り直す。そして弱い自分を叱咤した。

こんなことではこの先待ち受ける困難など、到底乗り越えられない。

「この五年間、お前には随分助けられた。感謝する」

「私も、ダグリード隊長の下で働けて光栄でした……楽しい日々でした」

差し出された手をブルースが握ると、強過ぎるほどの力で握り返された。未練を払拭し切れないという心情が伝わり、不覚にも目頭が熱くなる。

両親からはとうとう得られなかったもの……誰かに必要とされることは、これほどまでに甘美だった。その手を離すしかない自分が歯がゆい。自分が選んだ道は、明らかに破滅へと続いているのに。

「何か問題が起これば、いつでも来い。俺もダグリード家も助力は惜しまない」

「……ありがとうございます」

何かを察したような言葉に、繋がれた手を解いたブルースは、光る目もとを隠すように深々と頭を下げる。フォーサイスが退室するまで、その顔は上げられなかった。

「あんたって奴あ、ホントにどうしようもねえな」

声に反応して顔を上げると、半開きになった扉に寄りかかるようにして立つ大柄の男が目に入った。彼はひどく呆れた顔をしている。

「……ライサチエック、最後に何か確認したいことでも？」

主の許しも得ずズカズカと室内に入ってきた後任の彼に、ブルースはそう尋ねる。
「ねえよ。隊長も鬼だが、あんたのしごきも相当なもんだった。大概の非常事態なら、寝ながらも対処できらあ」

庶民の出の彼は口も素行も褒められたものではないが、任務は確実にこなす、実に有能な隊員である。ブルースが去ることになった今、隊長への忠誠心は隊内でもっとも強いだろう。

「だから、副隊長に推したんだ。後のことは任せた」

「迷惑な話だねえ……あんたが完璧にやり過ぎたお陰で、こっちは雑用の山だ。副隊長なんざ他の部隊じゃ、お飾りだったのによ」

「そう思うなら、今後は隊員内で分担してやるようにするんだな。後は任せたと云っただろう、やり方は好きに変えて構わない……ダグリード隊長も口出しはしないと言っている」

口では不平を言いながらも、自らの役割を放り出したりしないライサチェックの責任感の強さと頭の回転の速さを知っている。だから、ブルースは彼を後任に指名し、その引き継ぎにも容赦をしなかった。

「いいよ。あんたのやり方だから、つぎはぎだらけの部隊もまとまってんだ……寂し

くなっちゃうなあ」

「……ああ」

ブルースは実感を込めて頷く。当主としての責務や騎士としての誉れを求めるばかりで、何も与えてくれなかったフカッシャーの広大な邸宅よりも、この土と汗に塗れた男臭い兵舎の方が、自分にとっては安らげる場所だった。

フォースイスをはじめとして雷龍隊の隊員達は、フカッシャーの名ではなく、ブルース個人を認めてくれる。厳しい鍛錬や難易度の高い任務をともにしてきた部隊内には、固い結束が生まれていた。そんな彼らのもとを偽った自分のまま去らなければならないことが、ブルースには苦痛で堪らなかった。

「隊長が引き留められなかったんだ、俺らがどうできつとは思ってねえよ……だが、どんなに離れても俺らは仲間だ。そんだけは忘れんなよ」

まるで子供か小動物かのようにガシガシと頭を掻きまわされたが、その気持ちが温かくて嬉しい。

「ほれ、俺らからの餞別だ」

そう言って、彼はブルースに真新しい本を差し出す。黒革の背表紙で、しおり紐は花を模った美しい飾り結びになっていた。

「……つ、……これはサスキア王妃の」

「外地任務のついでに寄ったオルガイムで、チェイスが見つつけてきたんだよ」

確かに彼は外地任務に就いており、昨日戻ってきていたが、提出された報告書記載の任務地は翔国オルガイムとは正反對の場所だったはず……騎士団への入団理由を救世主への憧れからだと言っていたブルースは、サスキア王妃信仰者だ。軍神に恋しているとか、他の隊員達に散々揶揄^やされていた。

「ありがとう、これは……本当に嬉しい」

苦勞して引き締め直したはずの涙腺が、再び緩^{ゆる}み始める。アイリス人の血が半分流れるという翔国オルガイムのサスキア王妃は、ブルースがもつとも尊敬し、目標とする人物だった。かつて対面した幼いブルースを一瞬にして魅了した、戦の神の名に相応^{ふさわ}しい救世主たる彼の人……この本は彼女が筆をとった剣術指南書なのだ。

己など及びもつかない剣の才を持つサスキア自ら著したこの書物は、ずっとブルースが欲していたものだった。オルガイム国内のみの発行で、訪問する機会に恵まれなかったため、その入手を半ば諦めていた。

「泣くな……綺麗な顔が台無しだぜ」

そう言って、再びブルースの頭を掻き混ぜてくるライサチェックの声も、感極まった

ように上擦^{うわす}っている。自分は本当によい仲間に恵まれた、騎士団に入らなければ、手に入れられなかった……だからこそ、ブルース・フカッシャーのまま隊を去らねばならないことが辛い。

明日になれば、ブルース・フカッシャーという人間は、エリアスルートのだどこにも存在しなくなるのだから。

2

十一年振りに袖を通したドレスは、登城時に着用する騎士の正装よりも遥かに窮屈だった。

後ろから侍女にコルセットの紐を容赦なくしめ上げられ、骨が悲鳴を上げる。圧力から歪みそうになる表情を何とか抑えた。化粧が崩れ、侍女の三刻もの努力を水泡に帰すことだけは避けた。これ以上分厚く真珠粉を塗り込められれば、きっと自分は窒息してしまふ。

目の前の姿見に映るのは、フカッシャー公爵家の令嬢ブルーデンス。偽りの色は剥がされ、金属のように鋭く輝く銀の頭髮と双眸……こちらこそ生来の姿なのに、自分の目にはひどくよそよそしく映った。

アイリス騎士団、雷龍隊副隊長ブルース・フカッシャーは、もう存在しない。

これから自分は、ダグリード侯爵家の現当主のもとへ嫁ぐ。妊娠が発覚し、宿る命が男児であると判明した半年前、母ティルディアが決めた縁組だった。ようやく男として生きることへの違和感が薄れてきた矢先、あまりに理不尽な話に眩暈がし……直後、激しい怒りに駆られて激昂する自分を、母は表情を変えずに切って捨てた。

フカッシャー家にとって「ブルース」の存在価値がなくなつた今、「ブルーデンス」として生きる他に道はないと……次いで持ち出された条件に、拒絶の言葉を失った。

自分の母は、世間一般の母親とはまったく違つた価値観を持つ人だ。どこまでも夫に従順で、家長の命に私情を決して挟まない。文化の異なる他国の人だからと納得するには、あまりにも我が子に対する情愛が欠落していた。

それでも唯々諾々と従っていればいつかは、と母の愛をわずかながら期待していた思ひは、今回のことで完全に砕け散った。

「黙っていれば、見られるようになりましたね……こめかみの傷もうまく隠せています」

小さな弟を抱くその人は、ブルーデンスの仕上がりに満足げに微笑む。母は、五十五歳という実年齢が信じ難いほどに瑞々しく美しい。長年にわたる両親の執念が実を結び、ティルディアがふた月ほど前に産み落とした同胞……その腕の中でやすやすと眠る弟バーネスは、どこまでも無垢な顔をしている。

「抱かせて頂いてもよろしいですか、母上」

ブルースの存在価値を打ち碎いた張本人ではあったが、血を分けた実の弟を憎む術を自分は知らない。

「いいえ、ドレスに皺が寄ります。それに、お母様とお呼びなさい。貴女の話し方は硬く、女らしさに欠けます」

「……以後、気をつけます。お母様」

ドレスの裾をそっと摘み、最大限の恭しさを持って頭を垂れる。ブルースとして生きた十一年より、ブルーデンスとして生きてきた時間の方がまだ二年長い……ここ半年の訓練の賜物でもあるが、物心つく前から徹底的に叩き込まれていた貴族令嬢としての立ち居振る舞いは身体に染み込み、完全に忘れ去ることはなかったのだ。

「所作は及第点でしょう」

その様子に、ティルディアも頷く。

「最後にお兄様にお会いしたいのですが、よろしいでしょうか？」
譲れない想いを双眸に宿して、訴える。

「いいでしょう。まだ少しですが時間があります。手短に」

「ありがとうございます」

再び一礼し、ブルーデンスは足早に部屋を出た。

* * *

病に倒れた異母兄ストレイスは、離れの館でひっそりと療養している。先妻の忘れ形見である彼は、愛情溢れるとても優しい人だった。生母の性質を受け継いだらしく、物静かで穏やかな性格と華奢な体躯は騎士に向かなかったが、父の期待に応えようと無理をした。彼の身体に病魔が巣くったのは、その優しさゆえだと思う。

「ブルーデンス……久しぶりだね、その姿」

今日は多少加減が良いようで、日の差し込む窓辺で安楽椅子に腰かけている。向けられた微笑みは、柔らかな日の光に溶けてしまいそうに儚げだ。

「お兄様……今日は、顔色がよろしいですね」

それでも、ブルーデンスはそう言って笑み返す。

「いつも寝てばかりはいられないだろう。特に、今日のような日は」

来てくれてよかった、といったストレイスの濁りのない眼は、自分の心の底まで見透かしているようだ。

「今までお世話になりました」

「ずっと助けられていたのは、私の方だよ。お前がいなければ、この年まで生きられなかった」

続けられた言葉に、ブルーデンスの表情がわずかに強張る。兄は知っているのだろう
か……母と自分が交わした密約を。

「私がこんな身体のせいだ、お前には無理を強いる。兄失格だ。ブルーデンス、お前はもつとわがままを言いなさい。堪えられないなら、そう言ってしまいなさい」

「いいえ、いいえ……お兄様は私を愛して下さいました。それだけで、私には十分です」
殺伐としたフカッシャー家で自分を心から愛してくれたのは、半分しか血の繋がらない兄だけだった。彼のためなら何を犠牲にしても構わなかった。だから今の自分がある。

「私はフォーサイス・ダグリードに嫁ぎます。あの方を、お慕いしているのです」
それもまた、紛れもない真実の気持ちだ。

「それは知っている、けれど……」

「いいのです、これで。私の幸せを、祈っては頂けませんか？」

ブルーデンスはそう言って、兄の二の句を封じる。

「誰よりも、何があっても祈っているよ。ブルーデンス」

「お兄様も、ご自愛を……」

「ドレスに皺しわが寄る。義母上に怒られるよ」

抱きしめようと伸ばしたブルーデンスの腕を押し留め、ストレイスは代わりに彼女の手を取る。

「綺麗だよ、お前の微笑みを受ける者こそ本当の幸せ者だ」

「……ありがとうございます」

澄んだ漆黒の双眸そうまに、ブルーデンスは兄の幸せを祈って微笑んだ。

* * *

五年前に一度だけ訪れたことのあるダグリード邸は、蔓薔薇つるばらに覆われた赤煉瓦あかれんがの壁で囲まれていた。当時、競うように咲き誇っていた深い紫の蔓薔薇は、ダグリード家の紋

章でもあったが、夏の今は青々とした葉のみが茂っていた。

「貴女の方がダグリード家の方々とは親しいでしょう……だからこそ、気を抜いてはなりませんよ」

馬車の窓から徐々に近づく屋敷を確認していたブルーデンスの横顔に、ティルディアが念を押す。

「はい、心得ております」

化粧ほどこしを施し、ドレスという名の鎧よろいをまとい……外見こそ完璧に取り繕つくろった自分。ブルーの面影は、唇に引かれた深紅で一分の隙もなく覆い隠した。後は自分の心に懸かかっている。

「では、行きますよ」

細かな装飾が施された錬鉄れんてつの門扉もんびの前で、静かに停止した馬車の扉が開く。もう逃れることはできない……身じろぐ度に内臓をしめつけるコルセットの圧力だけでなく、ブルーデンスの心は否応なく引き締まる。

「ようこそ、ティルディア！……貴女がブルーデンスね」

馬車のステップを降りた先で迎えてくれた前侯爵夫人は、記憶の中と同じ穏やかな笑みを向けてくれた。若々しい彼女は、娘のファティマとよく似た華やかな美貌の持ち主だ。

「はい、お初にお目にかかります。お出迎え頂きありがとうございます、エルロージュ様」
 ドレスを汚さぬよう気を配りながら、広がるペティコートの裾を摘み、極限まで腰を落として深く頭を垂れる。面識のあるエルロージュには、一切気を抜くわけにはいかなかった。

「遠いところを遥々、さぞ疲れたでしょうに」

「いいえ、皆様にお逢いすることが楽しみです……快適な旅でしたわ」

ゆっくりと姿勢を戻しながら、吐き気をもよおすような緊張を押し殺してブルーデンスは微笑む。

「私も楽しかったですわ。さあ、入って……」

「エルロージュ、私はここで」

二人のやりとりを満足そうな笑みを浮かべて見つめていたティルディアが、エルロージュの申し出を制してそう口を開く。

「リユーノが陛下から急なお召しを受けて、屋敷を空にはできませんの。ご存じのように、バーネスもまだ幼いでしょう？」

用意していた言葉を、愁いを帯びた表情とともに紡ぐ……その演技力には、いつ見ても感嘆の念を禁じ得ない。

「そうだったの、ごめんなさいね。ブルーデンスは責任を持ってお預かりするわ」

「いいえ、私こそごめんなさい。それでは、半年後に」

「ええ、楽しみにしているわ」

まるで古くからの親しい友人同士のように、エルロージュと手を握り合って笑みを交わし、ティルディアは完璧な礼を見せて馬車に戻る。扉が閉まると、流れるように馬車はその場を後にした。

「本当に、礼儀正しくて素晴らしい方ね……貴女のお義母様は」

「大変、よくして頂いております」

ティルディアの祖国の妹が半年前に病死し、娘が一人残された。一昨年前に父親も亡くしていたその娘に、手を差し伸べたのがティルディアだった。養女として迎え入れられた彼女の名前はブルーデンス……自分に与えられた新しい筋書きだ。

「中に入りましょう、ごめんなさいね。こんな大切な日に、あの子ったらまだ戻っていないのよ」

今日は騎士団本部での定例報告会で、フォーサイスはそれに参加しているのだ。かつては自分も同行していたが、今日はライサチェックが同行しているだろう。このところ大きな問題は起こっていないため、いくら長引いても今時分には終了している。

他の部隊との間でライサチエックが騒動を起こしたか、フォーサイス自身が意図的に遅らせているのか……恐らく後者だろう。

「ブルーデンス」とフォーサイスの間に面識はない。彼は妻となる自分の顔さえ知らないのだ。今回の縁組はフォーサイスにとって、当主として避けられない責務……彼が妻に望むことは、自分への従属であって愛ではない。

雷龍隊内^{らいりゅうたい}で、同性の仲間内でこそ気さくで誠実なフォーサイスだったが、女性に対しては半ば嫌悪に近い感情を持っていた。貴族の令嬢達にとつて、フォーサイスは漆黒の誘惑と称される整った容姿と、アイリスの剣の称号、類稀^{たぐいまれ}なる剣の才と三拍子揃った完璧な夫候補である。

関心を引くための行き過ぎた駆け引きや、女の汚い部分を散々見てきた彼の女嫌いはもう末期症状だった。もつとも近くで見えていたブルーデンスは、そんな彼の気持ちが理解でき、同情もしていたのだ。

「お気遣いありがとうございます、大丈夫です」

できることなら、今日は帰って来て欲しくない……ブルーデンスは挫け^{くじ}そうになる気持ち^{きもち}を隠して、エルロージュに微笑んだ。

「お母様、その方がお兄様の……？」

玄関広間に足を踏み入れたところで、凜^{りん}とした声とともに少女が奥の階段から早足で降りてくる。波打つ黒髪は、無造作に垂らされているだけに輝くばかりに美しく、夜を閉じ込めたような瞳も、まばゆく吸い込まれそうだ。唯一無二の友情を誓ったファティマ……彼女との再会が、懐かしさよりも緊張を孕^{はら}んでいるのが悲しい。

「ファティマ姫……で、いらっしやいますね？ 初めまして、ブルーデンスと申します」
同性として逢う今、ブルーデンスは自然な微笑みを浮かべることがひどく難しかった。
「ファティマで結構ですわ……似てらっしゃる、ブルース様に」

ため息のように吐かれた言葉に、胸は早鐘を打つ。

「義兄に……会ったことはありませんが、親しくされていたそうですね」

「ええ、突然騎士団を辞められて……引き留めなかったお兄様には失望しましたわ。あれだけお世話になった方ですのに」

「ファティマ、来られたばかりのブルーデンスの前でそのようなことを言っではいけない」

兄の非難を始めた彼女に、エルロージュが窘めるように言う。

「そうでしたわ……お義姉様、兄は仕事人間で面白味に欠けますし、冷たく感じることもあるかも知れませんが、本当は優しい人なのです」

「……ファティマっ、余計印象が悪いではないの」

さらに言葉を続けたファティマに、夫人は嘆息をこぼした。

「当主様は、素晴らしい方だと聞き及んでおります。私の方こそ、きちんとお仕えできるかどうか……」

微笑ましいやりとりを重ねる母娘に、ブルーデンスの緊張もやや解れる。

「きつと大丈夫ですわ、お義姉様はブルース様によく似てらっしゃいますもの」

「そう、でしょうか……？」

似ている、似ていると連呼するファティマに、ブルーデンスは内心堪ったものではなかった。黒と銀の色素の違いもさることながら、完璧主義者である母に造り上げられたこの姿。背格好こそ同じかもしれないが、顔立ちはそう似て見えないはずなのに。

「お姿ではなくて、雰囲気……剣を扱う方だけれど、普段はとても穏やかで優しい方でしたもの」

「ファティマは、ブルース様が本当に大好きだったのよ。それが二人とも恋心でなかったのが、私には残念でなかったのだけれど」

エルロージュの言葉に、ブルーデンスはわずかに目を見開いてしまう。一度しか面識のない夫人から、そのように思われていたとは意外だった。

「お会いしたのは一度だけだったけれど、本当に紳士な方なのよ。今回の縁組でティルディアに会って、それも納得したわ。素敵なお母様の教育の賜物だったのね」

「だから、ブルース様の義妹でいらっしゃる貴女がお兄様の奥様になって頂けると聞いて、嬉しかったのです。きつと、貴女なら……」

前侯爵夫人の言葉を受けたファティマの言葉半ばで、玄関の扉が大きく開け放たれる。

「……ただいま戻りました」

不機嫌を隠さない声に、ブルーデンスの心臓が大きく跳ねる。

「お兄様、遅いですわ！ みなでお迎えするはずでしたのに」

「……職務だ、仕方ないだろう」

「おやめなさい、二人とも。ブルーデンスの前でしょう」

陰悪な空気が漂いかけたところを、エルロージュがやや厳しい口調で遮る。ファティマに向けられていた彼の双眸が、そこでようやくブルーデンスに移された。

「ブルーデンスと申します、以後よろしくお願い致します」

フォーサイスの視線を避けるように、深く頭を垂れる。ずっと覚悟を決めてはいたも

の、実際に対面すると恐ろしいほどの緊張が全身に走った。

「……オルガイム人か」

優雅に結い上げられたブルーデンスの髪……右こめかみの傷を隠すために流された一房を、フォーサイスは清水をすくうようにその手にとって、無感情に呟いた。

「……っ、……申し訳ありません」

彼の予想外の行動に、ブルーデンスは弾かれたように顔を上げる。初めてかち合ったフォーサイスの視線は、まるで自分を射殺そうとするように鋭く、咄嗟に謝罪が口を突いてしまった。

そして、幾重にも塗り重ねた真珠粉で隠したはずの傷の存在に気付かれたのではないかと、気が気ではなかった。

「フォーサイス！ 何です、その態度はっ……」

とても褒められたものではない息子の対応に、エルロージュの叱責が飛ぶ。

「私は事実を口にしただけです」

視線が外され、髪も解放されたものの、ブルーデンスの緊張は頂点に達していた。

フォーサイスの一挙手一投足に全神経を集中させる……失敗は許されない。

「ご自分の妻となる方に、あんまりではありませんの！」



「半年後の話だろう、今はまだ自由にさせてもらいたいものだな」

ファティマの非難にも、彼はにべもない。

「……お疲れのところ、お手を煩わせてしまいました。申し訳ありません」

揺るぎない拒絶の言葉に、ブルーデンスは再度頭を垂れる。嫌悪感を孕んだ視線の鋭利さに、初めて彼に対して恐怖を感じた。

「最初に言っておこう。この縁組は、契約だ……お前にはダグリード侯爵家の後ろ盾を与える。我が家の規律さえ破らなければ何をしようと自由だ。望みがあれば母か妹のファティマに言うがいい。常識的な範囲のことならばすべて叶えられるだろう。対価としては、後継ぎを産んでもらう。ただそれだけだ、簡単だろう？」

「フォーサイス！」

「いえ、……誠心誠意、尽くさせて頂きます」

エルロージュの叱責を制し、ブルーデンスは頭を下げたまま言った。

「必要ない、私は何も望んでいない。だから、お前も私に何も望むな」

了解の言葉さえも一蹴し、フォーサイスはブルーデンスの脇を通り抜けて屋敷の中に入っただけだ。

「……ひどいわ、あんなこと」

ファティマは、兄の言動が信じられない様子で呟く。

「ごめんなさいっ、ブルーデンス……いつもは、あんなことを言うような子ではないのだけれど」

エルロージュもひどく動揺した様子で、下げられたままのブルーデンスの顔を覗き込むようにして謝罪の言葉を紡ぐ。

「大丈夫です、本当に……」

無理矢理口元に笑みを浮かべ、ブルーデンスは頭を振る。

きっとこれは、貴方を裏切り、偽ることへの罰……それでも、自分は前に進まなければならない。

3

外出したファティマが戻らない……その一報を聞いたのは、兵舎から戻った背闇の迫る夕刻のことだった。

屋敷内は不測の事態に騒然としていた。フォーサイスは最悪の結末を想像して狼狽す

る母を落ち着かせ、搜索のために再び屋敷を出ようと門扉を開いたところ、こちらを指す一塵の影が目に入る。ファティマを腕に抱いて馬を駆る若い騎士の姿には、この上ない安堵とともに、小さな驚きを覚えたものである。

ダグリード侯爵家と因縁浅からぬフカッシャー公爵家当主は、玉石混淆のアイリス騎士団の中、女と見紛うような華奢な体躯、三つ編みに結った腰までの長い髪が随分と不釣り合いだった。

しかしながら、その思慮深げな双眸の奥には、ぬるま湯に首まで浸かったような怠惰な貴族には、到底手に入れることができない鋭さがあつた。どこまで使えるかはわからないまでも、只者ではないだろう……フォースイスは、そんな彼の存在を微かに心に留めていたのだ。

「馬上からの無礼をお許しください。自分はアイリス騎士団角狼隊所属のブルース・フカッシャーと申します。ファティマ姫の馬車が夜盗に襲われているところに行き合わせ、僭越ながら屋敷までの護衛を務めさせて頂きました」

淀みのない口上を述べ、ひらりとその場に降り立った男ブルースは、蒼褪めて小刻みに震えるファティマの身体を馬上より恭しい所作で抱き下ろす。御者や従者の姿はなく、血に染まった布を額に巻いた彼の駆る馬は、馬車に繋いであったうちの一头であるらし

かった。手傷を負い、白い馬体は赤黒く汚れている……それらの示し出す真実に、心がひやりと冷え込んだ。

「……いやっ！」

余程怖い思いをしたのだろう。妹はブルースの首にその腕を巻きつけ、離れようとしていない。人見知りの激しいファティマが、家族以外にここまで懐くのは稀だった。

「ファティマ様……もう大丈夫ですよ。お兄様もいらっしゃいます」

剣を振るう者としては随分と繊細な指が、ファティマの髪を梳く。浮かべる微笑みも紡ぐ言葉も、つい先ほどまで戦いに身を投じていた者とは思えないような穏やかさを湛えていた……手傷を負って少なからず興奮しているだろうに、腕に抱くその存在を安心させようという細やかな配慮に、その年若さでと感嘆したものだった。

怯えるファティマを母に任せ、その後すぐに彼を伴って現場を検証した。致命傷ではないものの、逃走できない程度の負傷を負わされた夜盗達はその場に拘束されており、一味全員を捕らえることができた。その無駄のない剣筋は傷つけるためではなく、誰かを守るためのものだ。

妹の命を救ったことに対する感謝は当然だったが、それ以上にその腕が欲しいと思つた……探していた副官にこれほど相応しい人物はいない、彼なら安心して隊と、この背

を預けられる。

実際、いけ好かない角狼隊隊長に借りを作ってまで引き抜いたブルースは、想像以上に有能だった。生粋の貴族の出でありながら実に柔軟な思考の彼は、腕はあるが個性の強い隊員達をうまくまとめ上げた。自分のように強さですべてを掌握するのは違い、綺麗な鎧と鞭の役割分担が成立していた。それこそ仁徳なのだろう。

五年後、精鋭と呼ばれるまでに成長した雷龍隊……それを見届けたといわんばかりに、ブルースから突きつけられた除隊届。

フカッシャー公爵家はダグリード侯爵家に勝るとも劣らない名家、前の戦乱での負傷により將軍職を辞した前当主リユーノは、今なお軍部に強い影響力を持つ。家名に対する強過ぎるほどの誇り、厳格にして旧体制の塊のような男だったと記憶している。

その凝り固まった父の教育下で、あのようになやかに育ったのはまさに奇跡。現当主ブルースは実に有能で、立派にその責務を果たしていた。それなのに、生まれたばかりの弟にその座を奪われ、そのために騎士団さえ追われるという。リユーノの目には、彼が無力な赤子にさえ劣って見えたのか……そんな馬鹿な話はない。

ただ、ブルースの疲弊し切った姿を見れば、抗ってなお屈服せざるを得なかったのだということが知れた。引き留めるな、理由も聞くなというブルース……穏やかな性格だ

が、その意志は誰よりも固い。頑なな彼の態度に、何もできない、してやれない自分に、腹が立って仕方がなかった。

それと同時に、フカッシャー家がブルースを切り捨てた理由に思い当たった。半年前、突如として持ち上がったダグリード家とフカッシャー家の縁組……この縁組の背後には、リユーノの影がある。

彼が騎士団内で唯一干渉できない雷龍隊が、リユーノの息のかかった部隊と何度か衝突することがあった。今となっては偶然か必然かわからないが、副隊長を務めることになったブルースは、きつと隊の実権を自分から奪う命を受けていたはずだ。

だが、副官として影日向なく仕えてくれたブルースの忠誠心に裏表は存在しなかった。その忠誠心ゆえにリユーノに見限られたのだろう……そして、今度は養女を使って自分をとり込もうとしているのではあるまいか？

アイリスの社交界でもそうそう出逢えないほど美しい所作で、フォーサイスに腰を折ったフカッシャー家の令嬢ブルーデンス。

彼女は銀の髪と瞳を持っていた……ブルースの母ティルディアは生粋のオルガウム人であり、遠縁ながら王家の血を引いている。戦乱より前にフカッシャー家へと嫁いでき

た彼女には、祖国に妹がいた。その妹の娘がブルーデンスなのだ。

両親に先立たれて後ろ盾を失った彼女は、フカッシャー家の傀儡として生きる道を選んだ……ブルースとブルーデンス、二人の瞳は闇とそこに浮かぶ月のように対照的だ。けれど、葛藤を抑え込んでさらに強い意志の光を宿したそれは、驚くほどよく似ていた。その境遇が真実であれば、同情もしよう。ブルースがとうとう抗えなかったリユーノに、血縁関係もなく、何の力も持たない彼女が逆らえるはずがない。己の意思か、強制か……彼女にはフカッシャー家の陰謀が絡みついていて、切り離すことは不可能だ。都合の良過ぎるその出自にも、甚だ疑問が残る。

仮にこの縁組を断ったとしても、リユーノは諦めずに他の策を弄するだろう。フカッシャー家の名の下、騎士団全部隊の実権を握るために。だから、断ることはしなかった。正式な婚礼の儀はブルーデンスの母親の喪が明ける半年後、現時点では婚約者に過ぎない。今からダグリード家にやって来たのは、この家のしきたりを少しでも早く覚えるためだと言っていたが、一刻も早くフォーサイスに取り入り、既成事実の一つでも作ろうとしているのだろう。

今まで湯水のごとく押し寄せていた縁談話を切って捨ててきた自分が、今回に限って異を唱えなかったことに、いつまでも独身でいる自分を心配していた母と妹が色めき

立ったことも、事を円滑に進める潤滑油となった。

何も知らずに喜んでいる二人には少々気の毒だが、この縁組は決して実現しない。婚礼の儀を迎える前に自分は彼女の化けの皮を剥がし、フカッシャー家の陰謀を暴く。

貴族の権力争いになぞ、何の興味もない。今は亡き父に与えられた剣に生きる道、信頼できる部隊、それらさえ邪魔されなければ他には何も要らない。

だからこそ、それを脅かす者は許さない。汚い手を使って……実子さえ駒として使い、思い通りに動かなければ切って捨てて捨てるそのやり口には不快感を覚えずにはいられない。

俺はただ、雷龍隊を守りたいだけ……そして、初めてこの背中を預けられると思えた。有能な副官を取り戻したいだけだ。

4

ダグリード家古参の侍女であるデリスは、この度屋敷に迎えた当主フォーサイスの婚約者に戸惑いを覚えていた。

「おはようございます」

こちらに微笑みを向ける彼女は、使用人が目覚ましの紅茶を持って行くよりも早く起き、すでに一分の隙もなく身支度を調べていたのだ。何の不自由もないようにと女主人より重々言いつけられているのに、朝の挨拶とともに向けられたのは綺麗に化粧を施した顔。その銀髪も昨日と寸分違わぬ美しきで結い上げられている。

これでは、自分の出番などないではないか。

「どこか、おかしいでしょうか？」

右側だけ一房下ろした前髪に触れながら、彼女はデリスが向けた長過ぎる視線を訝るように小首を傾げた。

「申し訳ございません、ブルーデンス様……何うのが遅くなりました」

デリスは紅茶の載ったトレイを扉横の机に置き、慌てて膝を折って無礼を詫げる。

「顔を上げてください、悪いのは私の方です。貴女のお仕事を奪ってしまったのですね」

ブルーデンスは、デリスの前に身を屈める。

「物心ついた頃より、行儀見習いの一環で縁者の屋敷で侍女をしていたので、できることはついしてしまつて……以後気をつけますね」

「そんなつ……減相もございません！」

申し訳なさそうに彼女が告げた言葉に、デリスは一瞬呆気にとられるが、即座に頭を振った。

昨日のフォーサイスとブルーデンスの冷え切った対面は、居合わせた侍女達からデリスも聞いている。まるで予想していたかのように、彼女は動揺を見せなかったという。

翔国オルガイムの王家の血を引く銀の髪と瞳を持った美しき令嬢は、きつと今まで何不自由ない暮らしをしてきたのだらう。それが両親の死によって失われたものの、豪華な生活を忘れることができずに、異国の侯爵家に嫁ぐ道を選んだのだと自分達は勝手な解釈をした……一体、どんな嫌な女なのだろうと。

けれども、目の前に見える手は、繊細だが爪は短く切られており、自分達使用人と同じで実用的に整えられている。思慮深いその表情にも、贅沢に溺れる者の面影はまるでなかった。

よく考えてみれば、フカッシャー家から持参したドレスや装飾品、その他の荷解きの手伝いも彼女は辞退していた。大部分は別に運ばれてくるのだらうが、それでもかなりの量だったことを覚えている。

けれど、部屋は綺麗に片付いていた。昨日とは違う薄紫色の裾の房飾りが美しいドレスも、昨夜のうちにきちんとクローゼットにかけられていたようで、皺一つ見当たらな

かった。使用人の手助けをまったく必要としないブルーデンス……その身のこなしは、アイリスの社交界でも滅多に見ない洗練された貴婦人のものである。

「お茶を頂きますね。それから、首飾りを選ぶのを手伝って頂けますか？」

「かしこまりました」

どういう方なのだろう、この方は……先入観を一瞬にして打ち碎かれたデリスは、新しい主にそれまでとは違い、心から頭を垂れた。

* * *

女だけの朝食を終え、家庭教師に追い立てられるように退室したファティマの不満顔を見送った後、エルロージュとブルーデンスは中庭に出る。

蔓薔薇を紋章とするダグリード家の庭園は、やはり薔薇が多かった。四季咲きのそれは庭師が丹誠込めて手入れをしているために、夏の今も瑞々しい。春先、屋敷を取り囲む外壁を埋める蔓薔薇が一斉に咲き誇れば、ダグリード家は名実ともに薔薇屋敷となる。目の前に咲いている色とりどりのカップ咲きの品種も美しいが、深い紫の蔓薔薇は神秘的でさえあった。五年前、宵闇の中、壁前に立っていたフォーサイスに、ブルーデ

スは目を奪われた。鋭利に整った容貌が、気高い花に重なって見えたのだ。

これが、アイリスの剣の名を継ぐ者……自分も彼のようにだったならば、きっと両親は自分を認めてくれた。その愛も得ることができたかもしれない。せめて、漆黒の髪と瞳だったなら、少しはその目を向けてくれたかもしれない。翔国オルガウムにおいては神聖な色とされているが、黒一色のこの国で、銀色の自分はあまりに特異だった。

「美しいわね」

物思いに耽っていたブルーデンスの隣で、エルロージュがため息を吐く。

「ええ、見事です」

二人の目の前にある黄色から薄紅色の変化が美しい花卉の多い薔薇は、特に華やかだった。

「貴女のことよ……ちよつとした立ち居振る舞いも、とても上品だわ」

八歳の頃から、ブルーデンスは行儀に厳しいことで有名な伯爵家に預けられていた。あまりの辛さに屋敷から逃げ出したこともあったが、母に連れ戻され、結局十三歳で騎士団に入るまで侍女として働かされた。そこで徹底的に行儀作法を叩き込まれたのだ。

染みついた造作は騎士になってからも抜けず、ふとした瞬間に出てしまう上品過ぎる所作が、まるで深窓の令嬢のようだとよくからかわれていた。

「髪が厳しかったので、所作だけは……当時は辛かったですけど、今となつてはよかったと思つていますわ」

本当にそれだけは幸いだった、決してこのような状況を望んだわけではないけれど。

「素晴らしいわ……ところで、その髪は自分で？」

「はい、オルガイムの娘は髪結いができるようになって初めて一人前なのです。婚約が決まったとき、片方の前髪を後ろと一緒に編み込んで、婚礼の儀を終えたらすべて一つに編み上げるのです」

オルガイムは飾り紐細工が名産品であるだけに、女性の髪のかき方も多種多様で美しい。ブルーデンスはティルディアより、ここ半年の間に徹底的に教え込まれていた。侍女に髪結いを任せれば、こめかみの傷の存在がフォーサイスらの耳に入る可能性が高い。オルガイム貴族の娘の慣習は、ブルーデンスにとっても都合がよかった。

「オルガイムの女性には、手先が器用なのね。飾り紐も美しいし」

「ええ、飾り紐は私も好きです……サスキア王妃も愛用されていますし」

エルロージュの言葉に、ブルーデンスも頷く。

「サスキア様はエリアスルートの人々の憧れですものね。貴女はお会いしたことがあつて？」

「幼いときに一度だけ。短い間でしただけど、それでも素晴らしい方であることはよくわかりました」

ブルーデンスは当時を思い出し、柔らかな笑みを浮かべた。

「この国に来られたときに私もお会いしたのだけれど、あんなに美しい方にお会いしたのは初めてだったわ。黒い髪と瞳以外は、オルガイムの騎士であつたお父様似なのだそうよ。あの方の美しさがダグリッド侯爵家の血によるものでないことが、残念でならないの。もちろんサスキア様と繋がりがあるのは光栄だわ。けれど、あの美しさの数分の一でも自分にあればと、思つてしまうのよ」

フォーサイスの亡父アスターとエルロージュは従兄妹同士であつたらしい。遠縁ながら血縁関係のある彼女は、心からそう思つているようにため息を吐く。

「それだけ美しいのに欲張りでいらつしゃいますね、エルロージュ様は。ファティマ様も本当に愛らしいですし、当主様に至つては『漆黒の誘惑』の異名をお持ちとか？」

「あの子には言わないでね、不機嫌になるから。造りはいいのだから、もう少し愛想よくできたらいいのだけれど……今朝も、本当にごめんなさいね」

今朝の朝食の席には、フォーサイスも同席するはずだった。

しかし、早朝訓練があるといつて、彼は朝食も取らずに屋敷を出ていつてしまったのだ。

まだ日の光が差し始めたばかりの時分、馬を駆り門扉から出ていく彼の姿をブルーデンスは自室の窓から見ていた。フォーサイスがあらさまに距離を置こうとしていることに、わずかながら安堵してしまう己の弱さを、ブルーデンスは自嘲する。

他人行儀な「私」という呼称を使ったフォーサイスに、あそこまで心を乱されるとは思わなかった。今、あの鋭利なまでにまっすぐな視線を受け止める自信がない。

「騎士の務めは大切です、お氣になさらないでください。私の方が理解しなければならぬことですので」

「ありがとう……でも、初対面のあの態度はあまりにも失礼だったわ。謝罪もしないなんて、許されないことよ」

ブルーデンスは曖昧な笑みを浮かべて、頭を振る。

フォーサイスは自分との婚礼を望んではない。普通の貴族の令嬢であつたなら、あれだけの言葉を投げつけられて、黙ってはいなかっただろう。

しかし、残念ながらブルーデンスは普通の貴族の令嬢ではない。雷龍隊の実権を望む父リユーノから、隊長であるフォーサイスを籠絡するように密命を受けた間諜なのだ。

そんなことができるはずがないことは、ブルーデンス自身が一番わかつていた。それでも、ここに居続けなければならない理由がある。

己を偽り、彼を欺き……その先で、真実守りたいものは守れているのだろうか？

* * *

朝の訓練を終え、執務室に戻ったフォーサイスはひどくサクサした気持ちを抱えていた。

昨日は母と妹から、婚約者殿への対応を散々非難された。何も知らない二人にとって正当な言い分だろうが、自分にしてみればあの対応こそ真つ当なものだ。しかし事情を説明するわけにもいかずにそのまま無視していたせいで、ブルーデンスへの二人の同情はさらに強まってしまったらしい。

忌々しいことこの上ない。

「隊長、書類に承認を……つてえ、ご挨拶だな」

盛大にため息を吐いていたところ、申し訳程度に扉を叩き、自分の返事を待たず扉を開けて入ってきたライサチエックが、眉を顰める。

「悪い、お前にじゃない」

「随分と不景気な顔じゃねえの……昨日から、麗しい婚約者殿と一つ屋根の下なんだ

ろ？」

「顔を見てもいなくせに、勝手なことを抜かすな」

軽口を叩く彼に、フォーサイスは人でも射殺せそうな一瞥を送る。

「おお、怖え……フカッシャー家の人間だっというじゃねえか。男のブルースがあれだけべっぴんだったんだから、美人だろうよ。多少いき遅れちゃいるが、オルガイム人なら大した問題でもねえしな」

ライサチエックが発した最後の言葉に、フォーサイスはそういえばと思い返す。

ブルードゥランスはブルースの義妹ということになっているが、彼と同年だった。今回の婚約の焦点が彼女自身とは別にあつたせいで、自分は婚約者の年齢について、今の今まで何とも思っていなかったのだ。

アイリス貴族の娘の適齢期は、大体十六歳から二十歳までと言われている。二十歳を過ぎると、否応なしに嫁ぎ遅れの烙印を押されてしまう。男であるフォーサイスはそこまでとやかく言われることはなかったが、一昨年頃から興入れ先について母とやり合う妹の姿を、よく目にするようになっていた。

しかしながら、己の婚約者であるブルードゥランスはすでに二十四歳。ライサチエックの言う通り、オルガイム人は成年期、生殖期ともに長いことから、本国では二十歳を超え

た彼女が独り身であっても何の問題もないのかもしれない。

けれど、意図的に迎えた養女なら、なぜリユーノはアイリスでも不自然に思われないような年齢の者を選ばなかったのか？

戦前は知将として名高かったらしい彼が、わざわざブルードゥランスを選んだのには、何か特別な理由があるのだろうか？

「どうだかな……ただ、オートマターのような女だったな」

まるで視線を避けるように、深く頭を垂れて自分の言葉を受け止めていたブルードゥランス……一瞬だけ見た顔は確かに整っていて、造りもブルースに似ているようだった。何を考えているかわからない無機質な銀色の瞳と相まって、彼女の隙のない美しい所作は機械仕掛けの人形を思わせる。

「あんたの女嫌いを知っちゃいるが、いくらなんでもひどくねえか？ 未来の嫁さんだろ」

「……そんな生易しいものか、あれはフカッシャー家の間諜だ」

軽薄そうに見せているが、口の堅い彼に、フォーサイスはそう告げる。ブルースがいればいろいろと相談しただろうが、それを見越していたのかリユーノの手によって阻まれてしまった……彼は今、一体どこで何をさせられているのだろうか。

「……欲しいのは、雷龍隊ってことかよ」